Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-28

<紹介及批評>松井清講師著『増訂 貿易理論の研究』および『國際貿易政策思想史』

松井, 榮一

(Citation)
国民経済雑誌,72(2):112-116

(Issue Date)
1942-02

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055633

松井清講師著
『增訂貿易理論の研究』および『國際貿易政策思想史』

昭和十三年の秋、『貿易理論の研究』一卷を研究室にのこして軍務につかれた著者が、召集を解除せられて再び研究生活に還られたのは、昭和十五年の春も終りの頃のことであつたと思ふが、爾來一年餘りにして、前著の改訂版とその姉妹編たる『國際貿易政策思想史』の「二部作」の上梓を見るにいたつた。著者の不屈の研究心もさることながら、その眞摯なる努力と旺盛なる精力とには、たゞ〳〵感服のほかはない。しかして、その計畫の大規模なる、また仕事の手早い點において、たしかにその師の名を辱かしめないものがある。さきに前著刊行の折、本誌（第六卷第四號昭和十四年四月）上でさゝやかな書評を行つた私は、再び新著に對して紹介の筆をとる責務を感ずるものである。

『增訂貿易理論の研究』は結論の第八章「貿易理論に於ける理論と政策」が全部書き改められ（從つてこの部分の頁數は前著の一三頁から七一頁に增加されてゐる）、著者の積極的見解がやゝ明確に展開されてゐる。それ以前の部分（一二三頁まで）は初版のまゝであるが、せめて、そこに往々見られた誤記（單なる誤植を云々してゐるのではない）だけでも訂正されたならば、と遺憾に思はれる。

さて、前著において著者は「貿易理論の現代的課題」をまづ「近代理論の批判」に求めた（前掲書評、一二三―四頁參照）。いま、これを再び著者自身の言葉を以ていひ表はせば――

「かくて貿易理論の理論史は、かつては理論と政策との統一のうちに誕生した理論（古典派理論を指す）の、實踐性の喪失の過程として、言葉を換へて言ふならば自由貿易論の實踐性の喪失の過程として、今日に至つてゐる。（いはゆる近代理論において見らるゝところの）理論と政策の今日に於ける分裂は止揚されなければならぬ。（中略）貿易理論の現代的課題は先づ近代理論の批判より

始まる（下略）」（二三四頁）と。

しかしながら、「古典派の段階に於て實踐性を持つた自由貿易論が今日に於て實踐性を喪失したとするならば、近代理論に於ける理論的缺陷は、既に遠く古典派理論のうに胚胎してゐたものと言はなくてはならぬ。それ故に近代理論の批判と云ふ課題は、先づ古典理論の批判と云ふ課題が果されて後着手さるべきである」（二三四頁）。そこで著者は、「先づ古典派理論及び近代理論の批判を行つた後に、現代的貿易理論を展開すべき基礎理論を一つ一つの部分的テマについて」即ち、國際貿易の概念、國際貿易の理論、國際價格の理論、國際資本移動の理論、および國際收支均衡の理論――これは本書における著者の貿易理論史的研究の主要內容をなすものである――について、「與へ」る。しかして、これによつて、「現代に於ける貿易政策の諸の型態をも合理的に基礎づけうるやうな眞に現代的な理論が展開される筈である」といふ（二三五頁）。要するにそれはまづ第一に、「從來の貿易理論の根本的缺陷」たる「自然主義的な構想」（二三四―五頁）を批判することにより、更に進んでは、「古典派の持つてゐた科學的側面をより具體的に展開することによつて」（二五六―七頁）なされるのであるが、いま我々はその所論の詳細をこゝで紹介する紙幅をもたないことを遺憾とする。著者の抱懷する理論の內容は大體において理解することができる。しかし、そこには餘りにも多くの Schlagwort 的な表現が見出されるから、著者の眞意を讀者に十二分に諒解せしめるには、更により一層詳細なる理論の展開が必要であらう。こゝに組み立てられた理論の骨骼に血と肉を與ふる仕事が著者に要請されるわけである。

以上の、從來の貿易理論の批判は、「一應論理的批判に限られてゐる。」この論理的批判は、しかしながら、貿易理論をその「思想史的な地盤から批判するところの、謂はゆるイデオロギー的批判と不可分の關係に立つてゐる」（二三六頁）。この後の課題を果さうとするものが新著『國際貿易政策思想史』である。

著者は國際貿易の本質を、商品交換たる國際貿易は常

に利潤率の上昇を通じて社會生産物の增大を來す、といふ命題の中に見出すのであるが、「この一般的規定は、各國民經濟の異なるに從つて特殊的に現はれ、それに應じて、かゝる貿易を導かんとする貿易政策もまた特殊的な形態をとる。」この「各國民經濟の構造に應ずる貿易及び貿易政策の特殊的型態」即ち「貿易及び貿易政策の現實型」が本書において問題となるのである(三五頁)。

既に貿易政策そのものがさうである如く、「貿易政策の思想もまた各國の經濟の基礎構造との關聯に於て考察され」ねばならぬ。かくすることによつて「初めて各々の思想が歷史上に果した客觀的役割が明かにされる。」しかしながら、「思想史〔が〕現代的意義をもちうる」ためには、今日の資本主義的經濟構造に對する國民的統制の立場から、從來の思想への批判が、更に、試みられねばならぬ。即ち、著者は國際貿易政策「思想史の課題は、種々の思想が生れては消えつゝ歷史上に果した客觀的役割を明かにすると同時に、國民的立場からこれを批判することに存する」となし、「英國及び獨逸の例についてかゝる課題に答へんとする」のである(三八頁)。

著者の敍述はアダム・スミスに始まり、マルサス、リカードにおいて「英國經濟確立期に於ける貿易政策思想」を檢討し(第一編)、次いで獨逸に移り、まづ「獨逸經濟確立期に於ける貿易政策思想」を、リスト、獨逸マンチエスター學派(プリンス＝スミス)、後期歷史學派＝講壇社會主義者(ワグナー)に顧み(第二編)、更に「獨逸經濟の獨占化と貿易政策思想」の關聯を、ハルムスの世界經濟學、ハーバラーの貿易論、および最近におけるプレドエールの廣域經濟論について見るのである(第三編)。しかして、前述の著者の方法に從つて、これらの思想の歷史的意義ないし役割が明かにされる。即ち、繰返していへば、それが如何なる經濟的發展の地盤の上に現はれ、如何なる立場において「國民的」であり得たか、そして如何にしてその思想の抽象性を露呈することによつて沒落するにいたつたかゞ解明されるのである。その際、まづ以てそれぞれの時代における當該國の經濟的發達狀態の理解が必要であるが、本書においては、大體に

おいて代表的な經濟史書によつて、簡單にして要を得た經濟史的敍述が見られる。評者は、著者のこの部分の敍述の筆致に精彩を放てるのを感じた。たゞしかし、現代に近づくに從つて、特に獨占經濟段階に關する記述が簡略になつてゐるのは、それらの歷史的事實が我々の身近かにあるが故に、敢て說明の必要なしと考へられたゝめであらうか。それはともかくとして、讀者は本書において、著者の意圖するところの貿易政策思想史の課題は、大體において果されてゐるのを知るであらう。

およそ或る一つの思想をその產み出せる時代の經濟的地盤において理解することは、極めて重要なことである。かつてアツシユレーが指摘せる如く、すべての經濟學說はその當時存在した條件の上に築き上げられたものであるから、時代を超越して普遍妥當性を要求し得るものでない。しかしながら、經濟學說の相對性を主張して、その思想の果した歷史的役割を指摘するのみにては、歷史主義に墮する危險がある。これらの學說ないし思想の中から現在にもなほ妥當するものを見出し、新なる構想において現代の貿易理論および貿易政策思想を構成しなければならない。著者はプレドエールの廣域經濟論を批判して、「廣域經濟論もまた經濟の論理を缺くわけにはゆかない。（中略）何らかの形に於ける國際貿易の論理を必要とする」といひ、そこに「國際貿易論（中略）の現代的課題が存する」と本書を結んでゐる（三二八頁）。我々が著者に期待するところは、まさにこの新なる現代貿易理論の展開なのである。幸ひ著者は「一日も早く直接祖國の當面する問題に立歸りたい」念願から、「日本及び東亞貿易の現實に關する研究に沒頭してを」られるといふ（自序二—三頁）。その成果を待望するもの、ひとり評者のみではなからう。

以上評者の理解したところの著者の構想を紹介するのみで、既に與へられた紙數を超過したやうである。個々の點について私見を披瀝して著者に敎へを乞ふことは他の機會に讓らねばならぬ。たゞ、著者の大膽な敍述についてはかつて指摘したところであるが（前掲書評一二一頁）、本書

においてもまた隨所に見られる。例へば、シュンペーターがハーバラーの「僚友」であつたり（『增訂貿易理論の研究』二三二頁）、アモンがハーバラーと〻もに「純粹經濟學」の中に入れられて同床異夢をむさぼつてゐる（『國際貿易政策思想史』二七五頁）など、またブユルテンベルガーがモリツツ・モールのVornahmeであつたりする（同上、八五頁、一）のもその一例である。誤植の多いのも氣になるが、しかし、かくの如き瑕瑾の指摘が本書の價値を決して傷くるものでないことを、確信するものである。（昭和十六年大晦日）

『增訂貿易理論の研究』A5版、本文二九五頁、昭和十六年九月有斐閣發行、定價貳圓八拾錢

『國際貿易政策思想史』A5版、本文三二八頁、昭和十六年九月、有斐閣發行、定價參圓參拾錢

（松井　榮一）